慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	学びの場の風景：幕末維新期の日本人の見た西洋社会と教育(3)：明治初期の初等教育における世界地理教育と福澤諭吉『世界国尽』
Sub Title	The Japanese observations of western education in the mid-nineteenth century (3) : elementary geography education and FukuzawaYukichi
Author	太田, 昭子(Ota, Akiko)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2018
Jtitle	教養論叢 (Kyoyo-ronso). No.139 (2018. 2) ,p.25- 49
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	朝吹亮二先生退職記念特集号 = Theses in honour of the retirement of professor Asabuki, Ryoji 論説
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00062752-00000139-0025

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

学びの場の風景：幕末維新期の日本人の見た西洋社会と教育（3）——明治初期の初等教育における世界地理教育と福澤諭吉『世界国尽』——

太　田　昭　子

6）福澤諭吉『世界国尽』の分析

本稿では，「学びの場の風景：幕末維新期の日本人の見た西洋社会と教育（1）」[1]，「学びの場の風景：幕末維新期の日本人の見た西洋社会と教育（2）」[2]（以下，「学びの場の風景（1）」「学びの場の風景（2）」と略記）を踏まえ，福澤諭吉『世界国尽』の分析を中心に，明治初期日本の初等地理教育について考察する。それを通して，19 世紀半ばの学びの場に福澤がどのようにかかわり，位置づけられるのかを論じたい。

6）— 1. 『世界国尽』の構成の特徴

6）— 1 — 1. ページの構成

福澤諭吉は，「幾千百年來蟄居の人民が俄に國を開て世界に交らんとするには，先づ其世界の何物にして何れの方角に位するやを知り，其地名を知り其遠近を知るは最も大切なること」[3]と，いわゆる知識人層よりも幅広い国民の啓蒙の一環として，世界地理の重要性に着目した。世の中が目まぐるしく変化していた明治初期の人々にとって，世界を知ることがまず肝要だと福澤は考えたのである。他者を知ることは，同時に自分の立ち位置を理解することでもある。福澤は，鎖国時代から知識人層が活用していた，『海国図誌』『聯邦志略』『瀛環志畧（えいかん）』『地理全志』『坤輿図識』などの漢籍の地理書の構成[4]も踏まえつつ，寺子屋で馴染みのある様式を組み合わせ，『世界国尽』（1869）をまとめ

た。その特徴は，どのような読者にとっても平易な文章でありながら内容は多岐にわたっている点と，知識を記憶に残しやすくする仕掛けが多数施されている点である。

『世界国尽』は 6 冊（全 6 巻）の和綴じ本として出版された。各巻の紙数は平均十数丁（十数枚）で，最も枚数の多い巻三[5)]でも 33 丁と薄手である。附録である巻六を除き，各巻の頁は上・下（上 1/3，下 2/3）に分けられ，ページ下段が本文，上段が頭書（かしらがき）となっており，本文には世界一周旅行を体験しているような内容が，当時の子供に読みやすい行書体で記されていた。文章は音読に適し，復唱・暗唱しやすい七五調である。一方，上段の頭書には補足的な解説と多数の図版が配置され，七五調ではない解説文が，楷書体とひらがな片仮名の混じった字体で記されていた。上段・下段の文章は，どちらも全文の漢字にルビが振られるなど，子供に読みやすい配慮がなされていた[6)]。これに対して，序文は漢字と片仮名で記され，漢字にルビは振られておらず，子供が読むのを必ずしも前提としていなかったことをうかがわせる。子供たちは本文を復唱・暗唱しながら，図版に好奇心をくすぐられ，より踏み込んだ頭書の解説を自分で読むなり教えてもらうなりしたと考えられる。手習いの教科書に使われた往来物の中には，子供たちが擬似的な旅行を体験しながら地理を学ぶ様式が存在していたことが知られているが，『世界国尽』はこの様式を踏襲したわけである。

頭書は，頭注・首書とも呼ばれ，ページ上部に書き込まれた注釈などのことである。頭書を用いる様式は漢籍の流れを汲むもので，当時の日本の書籍では珍しくはなかった。江戸時代の往来物の代表的存在だった『庭訓往来』なども，ページ下段に行書体の本文，ページ上段に頭書や挿絵，という構成になっている。ただ，『世界国尽』の方が挿絵の枚数がはるかに多く，巻六を除き，どの巻もページを 2 丁繰れば挿絵を見られるほどの高頻度だった。また巻一から巻五の各巻末には，色刷りの折込地図が必ず入っていた。図版は，疑似的な旅行を体験する仕掛けとなり，また新しい風俗や価値観に，視覚的に接する機会となっていた。

同時代の西洋諸国の地理教科書におけるページ構成にはどのような特徴があ

ったのだろうか。そもそも洋書では，頭書よりも脚註や後註をつける様式が一般的であるため，頭書をつけた教科書は見当たらない。『世界国尽』執筆に際し福澤が参照したことが確実な *Mitchell's New School Geography* や *Cornell's High School Geography* なども，脚註のあるページが散見される程度で，註に対して特別な注意は払われていないように見受けられる。慶應義塾で使用されていたGoldsmith 著 *A Grammar of Geography*[7] も同様である。アメリカ・イギリスの地理教科書は，概して地誌的情報を淡々と記述する構成になっており，子供が学習を楽しむことへの配慮も，そのために註を活用する姿勢も見られない。むろん，児童用の『世界国尽』と『世界国尽』より上の年齢の生徒用に編集された地理教科書を単純に比較することは慎むべきだが，比較的低い年齢層を対象とした *Cornell's Intermediate Geography*[8] などにもほぼ同じ傾向が見出される。ページを上下二分割し，相互補完する内容を配置した日本の往来物の伝統には，19世紀のアメリカやイギリスにおける児童用の地理教科書に比べ，一日の長があったと言えよう。そして，それをうまく取り入れた『世界国尽』[9] が人気を博したのも当然だったのではなかろうか。

源昌久氏やアルバート・クレイグ氏などの書誌的先行研究[10] により，福澤諭吉が主にアメリカの地理教科書の挿絵を使用したことは既に明らかになっており，『世界国尽』がアメリカの地理教科書の地図や図版から多大な影響を受けていたことも跡づけられている。対象とする年齢層が『世界国尽』と比較的近い *Cornell's Intermediate Geography* は，地図や挿絵をふんだんに盛り込み，その総数は『世界国尽』を上回っていた。また，他の英米の地理教科書類も精緻な銅版画の挿絵を多数採用している。しかし，『世界国尽』では，巻六を除けば，挿絵は全て頭書の中，つまりページ上段に配置されている点が，アメリカ・イギリスの地理教科書と異なる大きな特徴だろう。頭書に挿絵を配置する構成は，往来物の伝統ではあるが，頭書のない巻六でも，挿絵はページ上部に集められている。それにより，補完的な解説を記した頭書にも読み手の目が自然に向けられる構成となっていた。読み手の目の動きに一定の規則性を設定する構成と，英米諸国の教科書のように，そのような法則性は必ずしも設けずに挿絵を配置する構成を比べた場合，どちらに教育的効果を期待できるのか。それは

その分野の専門家が評価すべきことかも知れないが，少なくともこのようなページ構成は，子供たちが興味を失わずに知的好奇心を満たすための仕掛けだったと言えよう。そして，一見して楽しい旅案内風の教科書に緻密な計算が盛り込まれていたことは，注目に値するのではなかろうか。

6）― 1 ― 2. 韻を踏む形式

福澤諭吉は「其手本の文字を手習すると共に其文句を暗誦して自然に地理を覺えしむるの慣行」[11]に注目して，『世界国尽』の本文（ページ下段）で七五調を採用した。それが教育的効果を上げたことは既に述べたとおりである。それに対して，福澤が参照あるいは依拠したとされる英米の地理教科書は，韻を踏む形式になっていない。それでは，19 世紀アメリカやイギリスの子供用地理教科書では，韻を踏む形式は全く顧みられなかったのだろうか。英語圏には，Nursery rhyme のように，子供たちが韻を踏んだ詩を歌う伝統があったにもかかわらず，そのような様式は充分活かされなかったのか。

「学びの場の風景（1）」「学びの場の風景（2）」で考察したように，19 世紀前半から中葉にかけてアメリカ・イギリスで刊行された地理教科書は，中学レベル以上の生徒には網羅的な地誌の記述と試験を想定した問答を織り交ぜたもの，初等教育レベルの児童には問答形式で地誌情報をひたすら覚えさせるものが多かった[12]。特にイギリスでは視学官による口頭試問を意識した，受験参考書のような様相を呈した教科書類が中心で，当時の教師たちは，地図を示しながら教科書を使って地誌情報を暗記させたのである。

教科書に岬・湾・山・河川・平野・市町村分布・気候・産物などの地誌情報が延々と記されていたことから，このような地理教育の様式は，“Capes and Bays” education（直訳すれば「岬と湾」方式）とも呼ばれていた。暗記の過程で，記憶を促すために語呂合わせや韻を踏んだ歌などを取り入れることはあったようだが[13]，教科書自体の文章が韻を踏んでいた訳ではない。

当時アメリカやイギリスで使用されていた教科書類[14]の全てを網羅した訳ではないが，地理の教科書は概して無味乾燥なものだった。その中で，教科書本文が韻を踏む様式を採用した数少ない例として，1866 年にイギリスで刊行さ

れた DEVEREUX, Marion, *Geography in Rhyme*[15]が挙げられる。著者は教育に長年携わってきた経験から，韻を踏む文章の学習が記憶として定着しやすいことに注目していた。そして地理が重要科目であるにもかかわらず，子供たちに難しく退屈な科目と見なされていることを憂慮し，彼らが楽しみながら地理の重要な事柄を学べるような教科書を執筆したと序文に記している[16]。この教科書は56課から成り，読了すると世界一周できる構成になっていた。各国の地誌に加えてその国の国民性や衣食住の文化に触れた記述が多いなど，『世界国尽』と共通する要素も多い[17]。地図や挿絵の記載は一切ないが，本文中の数ヶ所で地図を見るように促す科白があることから，子供たちは別に地図を持っており，それを参照しながら学習した様子がうかがわれる[18]。本文は十数名の生徒たちが交わす韻を踏んだ会話文になっており，いわゆるロールプレイ（role play）形式がとられていた。科白がやや芝居がかっていて冗漫な傾向はあるものの，先生と生徒，あるいは試験官と生徒，という堅苦しい問答形式よりもリラックスした雰囲気の学びの場を提供したという意味で，この教科書の試みは，当時としてはかなり画期的だったと言えるだろう。

『世界国尽』と *Geography in Rhyme* には共通点も多いが，図版の有無などに加え，注目すべき違いが2点ある。1点目は，*Geography in Rhyme* には『世界国尽』巻六のような自然地理学・人文地理学を包括的に取り上げたセクションがなく，わずかに第1課で，地球の概要が簡単に語られる程度であること。『世界国尽』の場合も，自然地理学・人文地理学を扱った巻六は附録で，全ての児童が読むことを想定していたとは考えにくいが，最後に地理学全体の枠組みを示す構成にしたことには意味があった筈である。この点については本稿で後述するが，このような構成は，『世界国尽』の読者層が低年齢の児童だけでなく，寺子屋教育を受けた程度の大人も含んでいたことの裏づけとなっているのではなかろうか[19]。

2点目は，教科書の利用者，つまり子供たちの家庭環境の違いである。*Geography in Rhyme* には「昨年の夏，パパとママと一緒にマルタへ行った」と言う男子児童の科白があり[20]，他の登場人物もそれを違和感なく受け止めている。19世紀後半にイギリスで旅行ブームが起きていたとは言え，1860年代半

ばに家族で夏に海外旅行できたのは経済的に余裕のある家庭で，労働者階級が家族旅行できるようになったのはもっと後年のことであった。つまり *Geography in Rhyme* の著者は，いわゆる中流階級の子弟を読者として想定していたと考えて良いだろう。

これに対し，『世界国尽』がいわゆる庶民を対象としていたことは周知のとおりである。1869 年当時の庶民にとって，諸外国は，訪れることはおろか，全ての知識が白紙に近い未知の存在だった。だが，白紙＝無関心を意味していたのではない。江戸時代に地理関係の往来物が多数刊行された背景には，江戸時代の経済活動や交通の発展がもたらした庶民の生活圏の拡大があり，地理の知識を必要とする人々や旅に興味を抱く人々の増加が，国尽や都路往来など地理関係の往来物刊行につながった。商売往来・百姓往来など，産業関連の往来物が江戸時代に多数著されたのも，経済活動の拡充と無関係ではない[21)]。つまり，いわゆる鎖国政策がとられていた江戸時代から既に，未知の世界に対する人々の好奇心は着実に高まっており，寺子屋教育はそれと連動していた。日本の開国，明治維新を経て，日常生活でも学びの場でも好奇心が一層高まり，旅する楽しみと学校での学習を融合し，教室に居ながらにして教室の枠を超える教育方法を受け入れる土壌が，明治初期の学びの場には既に育まれていたのである。それを見逃さなかった福澤の『世界国尽』が充分成果をあげたのは，当然の成り行きだったとも言えるだろう。

Geography in Rhyme の様式の有用性が，近い将来広く認識されるに相違ないと著者が確信していた[22)]にもかかわらず，この教科書は，『世界国尽』のような大人気を博すことにはならなかった。記述内容の薄さが否めない点を差し引いても，「韻を踏んだ平易な文章を楽しみながら地理を学ぶ」という理念が取り入れられなかったことに，当時のイギリスにおける地理教育のあり方が垣間見られると言えよう。それに対して，『世界国尽』は，明治初期の地理教科書の一つに選ばれるほど高い評価を得た。

1872（明治 5）年の学制公布により，男女とも 6 歳から 13 歳までの全国民の就学が定められ，当時の小学は，下等小学（半年ごとに下級の 8 級から上級の 1 級まで 4 年間）と上等小学（同様に 4 年間）の 8 年制だった。「小学教則」の中で

『世界国尽』は，下等小学4級から1級で用いられるのがふさわしいと記されており[23]，複数年度にまたがって子供たちが使用する教科書に指定されていたことがわかる。下等小学で，いわゆる読み書き算盤に加え，修身・地理・物理学（福澤諭吉『訓蒙窮理図解』が物理学の教科書の一つとして使用された）が教えられていたことからも，明治初期の初等教育において，地理教育がいかに重視されていたかがうかがわれる[24]。

1872（明治5）年の学制公布当時は，まだ教科書が整備されていなかった。そのため文部省は，当時民間で出版され流布していた啓蒙書や翻訳書などの中から各教科の教科書を選び，翌年に公布された「小学教則」の中で標準教科書として示した[25]。1872（明治5）年に文部省が指定した地理教科書は6種類，うち5種類（福澤諭吉『世界国尽』『西洋事情』・内田正雄『輿地誌略』・橋爪貫一『世界商売往来』・片山淳吉『西洋衣食住』）が世界地理を扱い，残る1種類（瓜生寅『日本国尽』）が日本地理書だった[26]。世界地理書のうち，『西洋事情』や『輿地誌略』は子供にはやや難解だったし，『世界商売往来』『西洋衣食住』は地理的な内容を含む啓蒙書で，児童用の地理教科書として刊行された書籍ではない。その意味でも，『世界国尽』は文部省の挙げた初等地理教科書の中で，頭一つ抜きん出た存在だったと言えるだろう。世界地理は，地理学習を通して諸外国の歴史や文化も子供たちに学ばせる啓蒙的な役割を担っていたことが，標準教科書のラインアップからもうかがわれるが，『世界国尽』はこの役割に最適な教科書として重宝されたのである。

6）―2.『世界国尽』の内容

『世界国尽』の凡例の中で福澤諭吉は，「此書は世間にある飜譯書の風に異なれども，其實は皆，英吉利，亞米利加にて開版したる地理書，歴史類を取集め，その内より肝要の處だけ通俗に譯したるものにて，私の作意は毫も交へず」[27]と，この書が翻訳書である点を強調した。巻一の表紙裏の挿絵には「福澤諭吉譯述」と明記され，序文の大半を，Gulian C. Verplanck[28]（1786−1870）の文章が占めている。確かに福澤はアメリカやイギリスの地理教科書を活用していたが，「その内より肝要の處だけ通俗に譯したるもの」であるならば，取捨

図 1

出典：福澤諭吉『世界国尽』和綴じ本，巻一，表紙裏

選択のプロセスに福澤の「作意」が介在した可能性はあるのではないか。たとえば，『世界国尽』は頭書にさえ，細かい地誌情報をあまり記載せず，解説の主流は各国の歴史風土や政治体制などであった。これは漢籍の地理書はもとより，地誌情報満載のアメリカ・イギリスの地理教科書との大きな相違点であり，そこに福澤の意図が現れていると考えられるのではないか。それにもかかわらず，福澤が「私の作意は毫も交へず」と記したのは何故なのだろうか。また，『世界国尽』には，日本に関する解説が含まれておらず，巻六の附録でわずかに日本への言及がある程度にすぎない。アメリカ・イギリスの地理教科書

はそれぞれ自国の地理の解説にかなりの紙幅を割いていることから，福澤がこれらの教科書に倣ったわけでないことは明らかである。またアメリカ・イギリスの教科書には短いながら日本にも触れられているので，「訳述」する材料も提供されていた。だが『世界国尽』亞細亞洲は中国に関する記述から始まり，そのまま西へと駒を進めている。福澤は何故このような選択をしたのだろうか。これらの疑問点を念頭におきつつ，『世界国尽』の内容を，いくつかの視点に絞って検討していきたい。

6）―2―1.『世界国尽』とアジア・アフリカ

『世界国尽』は，巻一が序文などと亞細亞洲，巻二が阿非利加洲，巻三が歐羅巴洲，巻四が北亞米利加洲，巻五が南亞米利加洲・大洋洲，巻六は附録で地理学概論が収録されている。つまり，日本を起点に世界一周旅行をして，最後に地理の理論的な枠組みについても学ぶという流れになっている。

『世界国尽』冒頭の段落には，「土地の風俗人情も，處變（ところかは）ればしなかはる。その様々を知らざるは，人のひとたる甲斐もなし。」と記され，読み手の好奇心をくすぐる巧い導入部と言えるだろう。続く巻一の亞細亞洲は，「圓き地球のかよひ路は西の先にも西ありて，まはれば歸るもとの路」という文章で始まっており[29]，地球が丸いという認識自体が新鮮だった筈の当時の子供たちにとって，わくわくする出だしだったに相違ない。導入部のうまさという点では，たとえば『西洋旅案内』（1867）の序も挙げられるだろう。「論語に，朋（とも）遠方より來ることあり，亦悦ばしからずやと。朋の遠方より來るは随分悦ばしくもあるべけれども，唯人の來るを居ながら待ばかりでもなし。折節は此方からも遠方へ出懸（でかけ）たきものなり。」[30]と，当時の有識者であれば誰もが知っていた『論語』の一節を援用しながら，視点を見事にひっくり返し，旅の醍醐味へと読者をいざなっている。

『世界国尽』巻一の亞細亞洲は，日本を出発して西方向に旅する設定で，中国，印度（インドシナ半島も含む），中央アジア，西南アジア，最後にトルコとロシアの一部を取り上げた。トルコとロシアがアジア・ヨーロッパの両方にまたがっているという解釈は，アメリカ・イギリスの地理教科書に依拠したもの

であろう。巻一の約半分を中国に関する記述が占め，福澤の関心の高さをうかがわせるが，朝鮮半島に関する記述は見当たらない[31]。

中国（原文では「支那（カラ）」）について福澤は，本文の中で，広大な領土と歴史に触れ，「商賣繁昌土地にぎはひ東洋一の港」の香港が植民地化された経緯について次のように記した。

> そもそも「支那」の物語，---〈中略〉---仁義五常を重じて人情厚き風なりとその名も高かく聞えしが，文明開化後退去（アトズサリ），風俗次第に衰て德を修めず知をみがゝず我より外に人なしと世間知らずの高枕（たかまくら），暴君汚吏の意にまかせ下（しも）を抑へし悪政の天罰遁るゝところなく頃は天保十二年「英吉利國」と不和を起し唯（たゞ）一戰に打負て和睦願ひし償は洋銀二千一百萬，五處の港をうち開きなをも懲（こり）ざる無智の民，理もなきことに兵端を妄（みだり）に開く弱兵は負て戰ひまた負て今のすがたに成行（なりゆき）しその有様ぞ憐なり[32]。

このような文章を読んで，アヘン戦争も香港の植民地化も中国の自己責任という印象を読者が抱いたとしても不思議ではない。頭書には中国史について更に踏み込んだ解説がなされており，中国古来の歴史や思想への敬意は払われていた。たとえば，中国の往時の偉業として万里の長城が引き合いに出され，孔子は，日本でも聖人と尊敬される高名な学者として，門人たちに囲まれた挿絵と共に紹介されている。但し，それに続く解説は，「支那の政事（せいじ）の立方（たてかた）は，西洋の語（ことば）に「ですぽちっく」といへるものにて，唯上に立つ人の思ふ通に事をなす風なるゆへ，國中の人皆俗にいふ奉公人の根性になり」，それゆえに「眞實に國の爲を思ふ者なく，遂に外國の侮（あなどり）を受るよふになり」，それが香港割譲や広東などの強制的な開港につながり，「其後も始終外國人にふみつけらるゝよし」というものだった[33]。つまり中国の専制政治のもたらした弊害が，西洋諸国に踏み込まれることにつながったと述べられているのである。

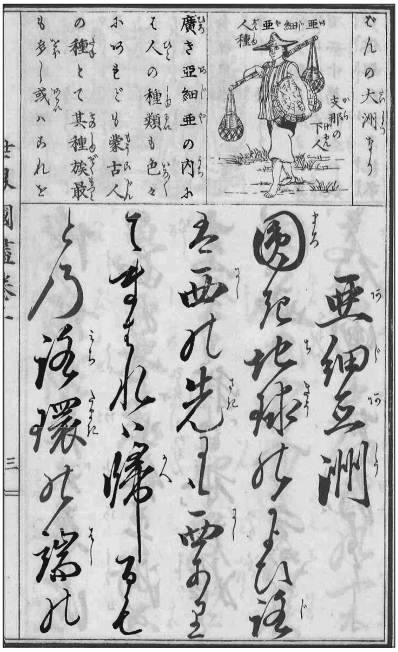
当時のアメリカ・イギリスの地理教科書の中で中国の政治形態に言及したものは，必ずと言ってよいほど“despotic”や“despotism”という表現を用いていた。「清朝の専制政治」が当時の欧米諸国の共通認識だったことがうかがわれるが，教科書に記された中国の専制政治に対する評価は，『世界国尽』とや

や趣を異にしていた。たとえば，他の教科書に比べ中国の記述が長い *Mitchell's School Geography* は，清朝皇帝の統治のあり方や，中国が西洋列強と結んだ条約に触れてはいるが，それは必ずしも中国の凋落というコンテクストの中では語られていない[34]。イギリスの地理教科書の *A Grammar of General Geography* は，「華夷思想」が中国の近代化を妨げていたと述べ，「中国の民はようやくイギリス人の優位性を認識し始めた」が政府の厳格な罰則に阻まれている[35]と記している。しかし，これはむしろ例外的な記述と言えるかも知れない。もし福澤がアメリカやイギリスの地理教科書から「作意は毫も交へず」翻訳したのなら，もう少し淡々とした記述になったとしてもおかしくはない。

では，中国人の風俗についての記述にはどのような特徴があるのだろうか。和綴じ本『世界国尽』を繙くと，亞細亞洲の冒頭で読者の目にまず飛び込んでくるのは，「亞細亞人種」「支那の下人」というキャプションのついた中国人の挿絵である（3丁表）。ページをめくると辮髪に結った中国人男性の挿絵が目に入る（4丁表）。その右には「國中の男子は皆けし坊主なり。始て見る人には甚をかしく思はる」[36]という頭書が記されていた。ここでは，「けし坊主」は辮髪を指していたが，そもそも芥子坊主とは，頭頂部だけ毛髪を筆の穂先のように残して周囲を剃りあげた江戸時代の子供の髪型と，芥子の果実を意味する言葉である。そして芥子の未熟な果実に切り込みを入れて乳液を採取し，アヘンが作られる。辮髪と芥子坊主の形状には確かに類似性はあるので，「けし坊主」は子供たちの理解を得やすくするために選ばれた表現だったとも考えられる。だが，「中国では成人男性が江戸時代の子供と同じ髪型をしている」という揶揄もそこにこめられてはいないだろうか。アヘン戦争で中国が敗北したことを思い出させる言葉を用いた背景に，何らかの含意を読み取ることもできるのではなかろうか。

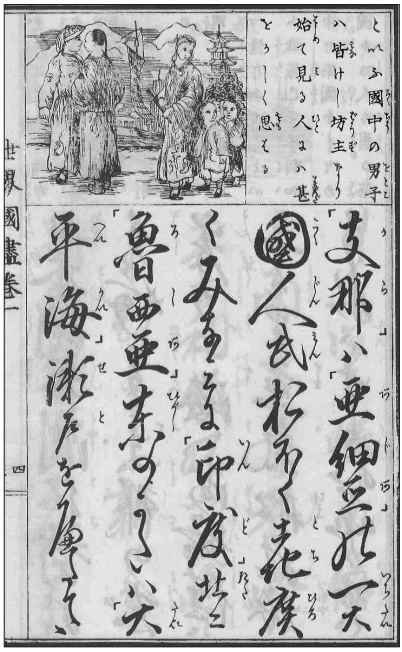
辮髪には pig tail という英語の蔑称もあるが，さすがにアメリカやイギリスの地理教科書でそのような表現は用いられておらず，また全ての教科書が辮髪に言及していたわけでもない。アメリカ・イギリスの地理教科書における中国の風俗描写はさほど長くはなかった。「中国人が変な髪型をしているのを知らないの？」という科白が登場する *Geography in Rhyme*[37]にしても，その後は万里

図 2



出典：福澤諭吉『世界国尽』和綴じ本，巻一，3 丁表

図 3



出典：福澤諭吉『世界国尽』和綴じ本，巻一，4 丁表

の長城についての会話が続き，中国文化に対して概ね好意的な内容になっている。一方，*Mitchell's School Geography* は，女性の纏足に注目し，「女性に対する扱い方，偶像崇拝，真実を見ようとしない姿勢などを考えると，中国は文明化が最も遅れているキリスト教国よりも低い位置づけになる」と厳しく評価した[38]。このような見解は，『世界国尽』巻六，「文字學問の道も隨分盛なり。但し嫉妬の心深くして他國の人を忌み嫌ひ，婦女子を輕蔑し弱き者を苦しむる風あり。支那，土留古（とるこ），邊留社（べるしや）等の諸國はなかば開けたるものといふべし」[39]という，未開又は半開の文明についての記述とも呼応すると言えよう。

前述したように，「清朝の専制政治」あるいは「東洋的専制政治」は西洋諸国の共通認識となっていたようで，『世界国尽』がこれに依拠して「ですぽちっく」と記したことは間違いないだろう。では，明治初期の日本における「東

洋的専制政治」の解釈とは，また福澤の見解とはどのようなものだったのだろうか[40]。西洋思想の一般的な解釈は，気候と政治制度の関係性を重視して東洋的専制と西洋的自由を対比させるもので，この図式は，モンテスキュー『法の精神』でも明示されている。箕作麟祥は『法の精神』の抄訳を『明六雑誌』に掲載したが[41]，その中でアリストテレス『政治学』の一節を補足引用し，「およそ「亜細亜」人は，機智ありて技芸に巧なりといえども，志気なきがゆえにつねに聴順して，あえて自由なるを欲せず」[42]と付け加えた。植木枝盛などが刺激を受け，明治初期の日本で，何が「亜細亜人」的なのか，どのようにすれば専制からの解放を実現できるのかなどの活発な議論へとつながったという[43]。東洋の気候風土が専制政治を生んだのであり，そのような専制国家はキリスト教文明国以下だと格付けした西洋思想の枠組みを素直に受け入れ，西洋礼賛に傾いた日本人も少なくなかったが，日本の進むべき路を視野に入れ，より複合的な解釈を試みていた明治初期の知識人も数多く存在したのである。

福澤の場合，『西洋事情』，『世界国尽』（巻三の挿絵や頭書，巻六「人間の地学」）[44]など初期の著作には，世界の文明を渾沌・蠻野・未開又は半開・文明開化などに分類する記述があり，その発想がミッチェルの地理教科書をはじめとする洋書の影響を受けたものであることも検証されている[45]。この分類は『文明論之概略』などに連なるものでもあるが，この発想が，単線的な発展段階に沿って国々をランク付けしたものだと見なすのはやや単純すぎるだろう。『世界国尽』に記された中国史を整理すると，中国の凋落のプロセスにスポットライトが当てられていたことが浮かび上がる：①中国はかつて学問も盛んな大国だったが「文明開化後退去」し先進性が後退した；②だが人々は「知をみがゝず」に現実を見ようとせず井の中の蛙とも言える中華思想に安住した；③そして専制君主と官吏のもとで民は自分の考えを持たなくなり，国が衰えた，という流れが強く意識されている。それでは「文明開化」していた頃の中国にはどのような気風があったと福澤は考えていたのだろうか。『世界国尽』は頭書で孔子に触れた程度で深く踏み込んではいないが，福澤は後年『文明論之概略』（1875）の中で，孟子・孔子が諸子百家を批判した時代には「人心の活潑にして自由の氣風ありし」[46]と推測している。つまり福澤は人心が活発で議論する

気風を文明開化の進捗度の物差しとしていたと考えられる。『世界国尽』の文章も，19 世紀半ばの中国にその気風が失われて国が衰えている〈現象〉だけをとらえ，日本は中国より上のレベルにあると単純に睥睨していた訳ではない。活発な議論による知の共有がなされなければどのような大国でも衰える，という格好の具体例が中国だと示すのが福澤の狙いだったのではないか。それならば，人心を活発化させるために必要なものは何なのか。それは人々が自分や自国を取り巻く状況を認識すること，そのための知を育み，自分の考えを持ちそれを発信すること，そしてそのためには教育がはじめの一歩となる，という考えに連なることが文中から読み取れるのではなかろうか。

最後に，『世界国尽』巻一のアジア篇，巻二のアフリカ篇で西洋列強の植民地政策がどのように記述されていたのか概観しておこう。『世界国尽』巻一・巻二には，植民地への言及が多数記載されているが，植民地支配についての事実関係を比較的淡々と記したものが多い。それはアメリカ・イギリスの地理教科書が“colonies”（植民地）についての情報を淡々と記述していることと呼応するが，それと同時に，植民地化を含む領土占有の歴史が世界各地の様々な攻防史の一側面と位置づけられていたことも文脈から伝わってくる。植民地には，「領土」「領分」また巻三では「飛地」[47]など，植民地化という行為を特に意識させない言葉が充てられたのも，それと無関係ではないだろう。福澤の初期の著作や記録には，西洋諸国が非西洋諸国に対して行なった砲艦外交に対する目立った批判は見られないが，西洋列強の姿勢を全面的に肯定していたとも言いきれない。中国のような古い大国であっても，国力が衰えれば「始終外國人にふみつけらるゝ」[48]ことになる。また旧国の邊留社（べるしや）も「下々の取扱よろしからざるゆへ，國の力，次第に衰へ」ロシアと二度戦って敗北し領土を失ったが，近年はイギリスの士官を雇って軍備の立て直しを図っている[49]。これらの記述には，弱肉強食の国際社会を生き抜く道を伝えようとした福澤の姿勢が垣間見られるのではなかろうか。

福澤は 1862−63 年に遣欧使節団の一員として渡欧した際，経由地のエジプトを訪れてはいたが，アフリカ大陸はほぼ未知の領域であり，巻二のアフリカ篇は巻一のアジア篇以上にアメリカ・イギリスの教科書に依拠していたと考え

られる。巻二の折込地図の記載には不正確な点が目立ち，記述内容が巻一（アジア）や巻三（ヨーロッパ），巻四（北米）に比べ，見劣りするのは否めない。また，西洋列強の植民地化政策に対する基本的なスタンスはアジア篇と変わらなかった。その中で注目すべきなのが，リベリアに関する記述だろう。西アフリカに位置するリベリアは，アメリカ植民地協会（American Colonization Society：略称 ACS）がアメリカで解放された黒人奴隷の入植を 1821 年から推進して設立され，1847 年にリベリア共和国として独立した。19 世紀後半のアフリカでは数少ない独立国であり，しかも共和国だった点でも，リベリアは特筆すべき存在だった。イギリスの地理教科書では，リベリアは比較的簡潔に触れられている程度で，たとえば Goldsmith 著 *A Grammar of General Geography*[50] の説明は僅か 8 行ほどにすぎない。それに対して，アメリカの地理教科書の場合，*Cornell's High School Geography* は解説文の中で ACS の入植開始から共和国独立の経緯にきっちり触れ，リベリア共和国の国旗も掲載した[51]。この教科書のアフリカ篇で国旗が掲載されたのはエジプトとリベリアのみである。また，*Mitchell's School Geography* では，三分の二ページをリベリアの記述に費やし，ACS の貢献や独立の経緯，人口や産業，周辺の入植地にまで触れていた[52]。一方，『世界国尽』は本文の中でリベリアを次のように紹介した。

> 中に一區（ヒトツ）の「理部利屋」は「阿非利加洲」の國柄に一種無類の共和政，人民凡（およそ）五十萬，議事院たてゝ事を議し，「北亞米利加」に流行の自由の風を移せしは暗き雨夜（あまよ）に一點の星の燿（かがや）く如くなり[53]。

『世界国尽』の解説はこれだけにとどまらず，頭書の中で，奴隷貿易に言及し，リベリア建国の経緯を説明した。

> ○古來阿非利加にはあしき風俗流行して，人を賣買（うりかい）することあり。これを「すれいぶ」といふ。「すれいぶ」とは生涯買切の奉公人といふことなり。亞米利加などへは夥しくこの人を買込み，田畑の働（はたらき）に用て牛馬同様に取扱ふ風習（ならひ）なりしが，心ある人はこれを憐み，救んとする者も亦多し。即ち理部利屋國（りべりやこく）は亞米利加にて志ある人の申合（まうしあはせ）にて建（たて）たる國なり。近來はこれがため人の賣買も大に減じたるよし[54]。

賛否両論のある ACS の理念や活動を，『世界国尽』はこのように高く評価したが，これはアメリカの地理教科書の論調に影響を受けたからだろう。奴隷貿易はアフリカの悪しき風俗というより，西洋諸国が持ち込んだ貿易だったことを考えると，この記述の全てが正確だった訳ではないが，巻一において，英・印・清の三角貿易に触れていない『世界国尽』が，奴隷貿易（環大西洋の三角貿易）に着目している点は興味深い。巻六「人間の地学」で 4 つに分けられた文明の形態の中で，「阿非利加の内地」は最も下位の「渾沌」に位置づけられた。その一方で共和政治は，政治形態の中で最高位に位置づけられている[55]。これらを考え合わせると，アフリカ大陸に，奴隷貿易の打開策の一つとして誕生した共和政の国家が存在しているという驚くべき発見を，福澤は特筆せずにいられなかったのであろう。

6）― 2 ― 2. 『世界国尽』とヨーロッパ・北アメリカ

『世界国尽』の巻三（歐羅巴洲），巻四（北亞米利加洲）には，福澤自身が訪れた諸国が数多く含まれ，巻三が和綴じ本で 33 丁，巻四が 24 丁と最も長かった。文明開化の中心と見なされた国々についての記述は内容も豊富で，当然のことながら好意的だった。取り上げるべき論点は多いが，本稿では，殊に何にスポットライトが当てられ，逆に何が触れられなかったのかを中心に考察したい。

イギリスについて『世界国尽』が注目したのは，富国強兵を具現した国の生活だった。福澤は『西洋事情』，『英国議事院談』（1869）など多数の著書の中でイギリスの政治制度を考察しているが，『世界国尽』巻三では議院内閣制や二院制などに触れず，産業化の進んだイギリスでいかにインフラが整っているかを紹介した。交通網の発達がもたらす情報網の拡大の様，ガス灯の輝きや都会の喧騒など，イギリスの都市にみなぎる活気が実にテンポよく語られ，読み進めるうちにあっという間にドーヴァー海峡をわたりフランスに入ってしまったと読者は感じたかも知れない。頭書では，蒸氣機関・傳信機・瓦斯などについて更に詳しい説明がなされ，

> 此等の仕掛は英吉利のみならず西洋諸國皆同様にて人の便利を達し，夜行するに提燈を持たず，荷物運ぶに馬の背を用ひず，急用の交通するとて草鞋をはひて道中を駈るものもなく，何事も智惠くらべの世の中なり[56]。

と記された。提灯・馬の背・草鞋をはいた飛脚などは当時の日本の子供たちにとって馴染み深い風物で，これらを引き合いに出したのは，西洋諸国の生活を想像しやすいようにと考えた福澤の工夫だったと言えるだろう。それに続く頭書では，「英吉利の海軍は世界第一なり」と，イギリス海軍の威光にも触れている。政治制度には敢えて触れず，読者である子供たちに，富国強兵を実現した社会の生活を感じてもらおうとする配慮が，イギリスについての記述につながったのではなかろうか。

続くフランスの記述で注目すべきなのが，ナポレオンの「存在感」だろう。本文におけるフランスの説明は，学問の水準の高さ，絹織物や酒類の生産品，「西洋一の強兵と名聲（ホマレ）」[57]を得ている軍隊などが中心だが，頭書は，冒頭こそフランスの学問や華やかな風俗に言及しているものの，その後はナポレオンの紹介に終始していた。不遇にめげず立身出世した偉人は，明治期の日本でもてはやされたが，頭書は「奈保禮恩（なぽれをん）はもと身分もなき人なりし」とナポレオンが叩き上げの人であることにまず触れ，彼の出自からフランス皇帝の座に就くまでの栄光と流罪に至るまでの略伝，そしてナポレオンの肖像画を掲載した。「千七百年代の末（寛政年中）より佛蘭西に大亂起り，そのせつ用ひられて陸軍の隊長となれり」[58]と，フランス革命は，あくまでナポレオンの出世のきっかけとして触れられるにとどまった。明治維新直後に子供用の教科書として刊行された『世界国尽』が，国王をギロチンにかけ処刑したフランス革命に触れることに消極的だったのは理解できる。だが，イギリスの項でも名誉革命に触れていないことを考え合わせると興味深い。頭書は，ナポレオンの甥のナポレオン3世を，「此君も英雄の名譽（ほまれ）あり。近來は頻（しきり）に海陸軍を盛にして，歐羅巴諸國みなこれを恐るといふ」[59]と高く評価し，解説を締め括った。

これに対して，アメリカ・イギリスの教科書のナポレオンの扱い方は微妙なものだった。ナポレオンとは因縁の浅からぬ関係にあったイギリスの地理教科

書の多くはナポレオンに詳しく触れているが，たとえば，*A Grammar of General Geography* はナポレオンについて詳述しつつも，いわゆる self-made man の美談にはせず，当時の国際関係と絡めてナポレオンの功罪を冷静に分析している[60]。一方，アメリカの地理教科書は，ナポレオンの記述が短いか省略する傾向があり，たとえば *Cornell's High School Geography* や *Cornell's Primary Geography* にはナポレオンへの言及さえ見られない。*Mitchell's School Geography* には「フランス陸軍はナポレオン 1 世の時代に最も畏れられていた」とあるだけで，ナポレオン 3 世に対しては「ヨーロッパの他のどの君主にも劣らず専制的（“despotic”）」[61]と辛口の評価を下している。このように，アメリカ・イギリスの教科書と『世界国尽』の違いは一目瞭然で，ナポレオンを称賛した『世界国尽』には，福澤の何らかの意図や作意がこめられていたと考えてよい。

巻四の北亞米利加洲で扱われているのは，アメリカ合衆国とメキシコ，西インド諸島と中米諸国だが，ここではアメリカ合衆国をめぐる記述における注目点を紹介したい。アメリカ合衆国の説明も，大まかな地理情報・産業・人種などの紹介に続き，アメリカ史にかなりの紙幅を割いている。本文ではアメリカ人が「自由」の精神を貫き独立を勝ち取ったプロセスと，「次第に進む國の富，百工製作商賣は「英吉利國」と肩竝らべ，文教技藝學校は「佛蘭西國」の右にいで」[62]，とその後の発展が紹介されている。頭書では，アメリカ独立戦争の経緯がかなり詳細に綴られているが，その中で次の 2 点に注目すべきだろう。1 点目は「此度亞米利加にて師（いくさ）の起りしは，誰一人として頭取もなく，國中の人一般に獨立を望み，婦人小兒に至るまでも其氣象を備へたる」[63]とあるように，独立戦争に際しては，民衆が先導役に引きずられたのではなく，婦女子に至るまで一人一人が独立心を持って行動していたと記されていること。2 点目は，その証左として，イギリス軍司令官のトマス・ゲイジ[64]に，毅然とした態度で抗議したボストンの子供たちのエピソードが挿絵と共に詳細に紹介[65]されていることである。逸話の概要は次のようなものだった。かまくらや雪だるまを作って遊んでいたボストンの子供たちが，イギリス軍歩兵たちに度重なる妨害行為を受け，業を煮やしてゲイジに直訴した。「親に謀反を教へられて爰へ來りしや」と冷笑するゲイジを，彼らは臆することなく睨みつけ，「我々共は

図 4

出典：福澤諭吉『世界国尽』和綴じ本，巻四，16 丁表

人の指圖受けて參りし者にあらず」と，経緯を滔々と述べたため，ゲイジも「流石亞米利加の自由の風に浴したる小兒等，勇ましき心かな」とほめたというのである。挿絵の原拠本は未詳[66]で，この逸話が有名なものかどうかも寡聞にして不明だが，少なくとも筆者が参照したアメリカ・イギリスの地理教科書類にこの逸話を記載したものはなかった。長幼の序が重んじられていた当時，一見すると大人にたてつくような子供たちの逸話を教科書に敢えて載せた意図は何だったのだろうか。自由の気風を紹介する手立てとして，子供の登場するエピソードがわかりやすいと福澤が考えたことは想像がつく。それに加えて，ボストンの子供たちが自らの意思で行動し，自分たちの言葉で理路整然と意思を伝える姿勢を貫いたことを福澤は強調したかったのではないか。専制政治では，民に自由はない代わりに自分の言動に責任を持つ必要もない。だが民主主義国家では，民に裁量の自由はあるが，それは責任を伴うものである。先を導く「先導者」と，人々を煽る「煽動者」の見極めをつけることこそが大切で，そのためには，自分の言葉で考えること，自分の言動に責任を持つことだと福澤は説いていた。自分の言動に責任を持ち行動することが自由の精神の根本にあるということが，この逸話にしのばせた福澤のメッセージだったのではなかろうか。

6）―2―3．巻六附録「地理学の総論」と『世界国尽』の枠組み

巻一から巻五まで続いた世界一周の旅をしめくくり，福澤は附録の巻六に，地理学の総論「天文の地學」「自然の地學」「人間の地學」を記した。アメリカ・イギリスの地理教科書ではこれらの総論を教科書の冒頭に置き，生徒たちに天文学・自然地理学・人文地理学の概要を教えてから各国の地理を学ばせるのが主流となっていた。これに対して，『世界国尽』では総論部分が巻末に附録扱いで掲載されている。総論から各論へという構成を何故逆転させ，各論から総論へという流れにしたのか。その意図について福澤は特に触れていないが，低年齢の児童には，まず理屈抜きに世界一周の旅を楽しんでもらい，知識が蓄積した段階で全体の枠組みを学ばせようとしたことは考えられる。巻一の亞細亞洲冒頭の，「圓き地球のかよひ路は西の先にも西ありて，まはれば歸るもとの路」という文章も，地球が球体であることを既に学んだ後に読めば，新鮮さが薄れてしまう。天体・地球の仕組みや地理用語を学ぶことも大切だが，異郷の地を〈旅〉してからでも遅くはないという訳である。ただ，この他に何か意図するところがなかったのか，巻六の内容を少し検討しておこう。

「天文の地學」では地球全体の仕組みに関する説明がなされ，豊富なデータや図版が盛り込まれている。そのしめくくりの部分は，熱帯・寒帯・中帯（＝温帯）の概説と，そこに住む人々の説明になっていた。

> 中帯の人は身體達者にして氣力あり。文明開化の極度にいたりしものも，唯此方角にある諸國のみ。歐羅巴，北亞米利加の合衆國，支那（カラ），日本等，皆中帯の内にあり[67]。

気候帯の中で欧米諸国・中国・日本が同じ範疇に属するとした日本への短い言及がここに見出されるが，筆者の参照したアメリカやイギリスの教科書には，熱帯・寒帯・温帯の説明に，このような一節は登場しない。*Mitchell's School Geography* はそれぞれの気候帯に生息する動物を挙げ，*Cornell's High School Geography* は，気候帯とは別に設けた人種や民族に関する項で，黄色人種の一例として日本人を挙げる一方，定住民族の例としてヨーロッパ人・アメリカ人・中国人・日本人・インド人・ペルシャ人・エジプト人などを挙げてい

る[68]。自然科学的な解説の中に，文明開化の議論をさりげなく滑り込ませた「天文の地學」のまとめ方には注目すべきだろう。

「自然の地學」は地理用語の解説が中心にまとめられ，最後の「人間の地學」では，世界の人種，文明と政治形態が分類され，各々に評価が下された。議論の大枠は，特にアメリカの教科書に依拠していたが，細部に看過できない相違点が見出される。たとえば，*Mitchell's School Geography* は，半開の国々の例として，「中国，日本，ビルマ，シャム，ペルシャ」を挙げていたが[69]，『世界国尽』では，「未開又は半開」の国々として，「支那，土留古（とるこ），邊留社（べるしや）等の諸國」[70]となっている。つまり福澤は日本を外したのである。その背景として，クレイグ氏は，1869 年にはまだ攘夷論者の暗殺の危険性があったことを挙げ，福澤の取った措置は賢明だったと評価している[71]。『世界国尽』の項に福澤が日本を敢えて入れなかった背景にも，このような時代の空気は関係していたのだろうか。これまでの考察からも明らかなように，『世界国尽』は単なる翻訳とは言えず，随所に福澤の「作意」が散りばめられた作品だった。それにもかかわらず，福澤が「私の作意は毫も交へず」とわざわざ記したのは，俗文で綴られた子供用教科書に「不似合なる難解の英文字を飜譯して世間に示したらば，自から本書の重きを成すこともあらんか」[72]と，単に箔をつけるためだった訳ではなく，ある種の逃げ道を用意するためだったとも考えられるだろう。

「学びの場の風景（1）」でも述べたように，19 世紀半ばのアメリカの地理教科書の多くは，文明の発展段階の立場をとっており，『世界国尽』の記述もこの分類方法を反映していた。『西洋事情』『学問のすゝめ』『文明論之概略』などの文明観にも投影されているのは，福澤がこの分類方法に共感を抱いていたからではあるが，福澤が決して単純な発展段階論の枠組みを鵜呑みにしていた訳ではないことは本稿で検討したとおりである。だが，その平易な語り口ゆえに，『世界国尽』が却って単純に図式化してとらえられ，〈福澤の世界観・歴史観〉として独り歩きしていった要素も否定できない。教師たちが福澤のメッセージをとらえきれず表面的な説明しかできなかった場合，暗唱による刷り込みによって，子供たちが世界の国々や文明，植民地化政策などに対して偏った見方を抱く危険性は充分にあっただろう。福澤のリズミカルで名調子とも言える

文章ゆえに，その危険性は尚のこと高く，暗唱による安易な刷り込みによって植民地主義の正当性を強調する教育がなされた場合，子供たちが偏った歴史観を抱く危険性は充分にあった。つまり「自分の言葉で考え，自分で判断できる力を養いなさい」という福澤の意図とは裏腹の教育が行なわれる危うさがあったと考えられるのである。

また，巻六のように，一見すると客観的なデータの中に人種や国のランクづけを織り込むような文章，あるいは客観的な地理情報の後に国家や政治形態を分類する文章などから，客観的な記述と主観的な考察を峻別して理解するのは難しくなる筈だ。このような論法は，同時期の日本における地理教科書にも見出されるのだろうか。さらに，日本の地理教育はその後どのように変わっていったのだろうか。これらを検討することは，〈学びの場〉の歴史を考える上で避けては通れない。紙幅の関係もあり，本稿では『世界国尽』に登場した諸国の全てを網羅することはできなかったが，稿を改めて，これらの残された課題について，福澤の文明観・国家観などと合わせて検討し，論じたいと考えている。

注

(1)　太田昭子「学びの場の風景：幕末維新期の日本人の見た西洋社会と教育（1)」(『教養論叢』第 135 号，2014 年 3 月)，43−69 頁。

(2)　太田昭子「学びの場の風景：幕末維新期の日本人の見た西洋社会と教育（2)」(『教養論叢』第 136 号，2015 年 3 月)，47−63 頁。

(3)　福澤諭吉『福澤全集緒言』(『福澤諭吉全集』第 1 巻，岩波書店，1959 年)，37 頁。(以下，『福澤諭吉全集』は『全集』と略記する。)

(4)　漢籍の地理書は，地誌情報だけでなく，世界各国の歴史・産業・政治経済制度・文物・人種構成などを幅広く網羅していた。(これらの多くは「漢訳西学書」と呼ばれる世界地理書だった。)

(5)　『世界国尽』巻数の表記：『全集』は一の巻，二の巻，のように記しているが，本稿の表記は，和綴じ本に倣い，巻一，巻二，のようにした。

(6)　詳細な情報は慶應義塾大学メディアセンターデジタルコレクション下記サイト参照。http://dcollections.lib.keio.ac.jp/ja/fukuzawa/a13/34（2017.9.27. 参照）

(7)　Goldsmith 著の地理教科書については「学びの場の風景（2)」参照。

(8)　CORNELL, Sophia S., *Cornell's Intermediate Geography*, (NY: Appleton, 1886)．慶應義

塾大学図書館所蔵は 1886 年版だが，*Cornell's Intermediate Geography* は 1852 年頃から刊行され，改訂を重ねている。

(9)　『全集』第 2 巻所収の『世界国尽』では，一部の挿絵が二段組みになっているが，原典の和綴じ本には二段組み構成は見られない。

(10)　源昌久『近代日本における地理学の一潮流』（学文社，2003 年），アルバート・クレイグ『文明と啓蒙―初期福澤諭吉の思想―』（慶應義塾大学出版会，2009 年）など参照。

(11)　福澤諭吉『福澤全集緒言』（『全集』第 1 巻，岩波書店，1959 年），37 頁。

(12)　BREWER, E.C., *My First Book of Geography*,（London: Cassell, 1864）; HOOKE, J.J., *Hooke's Easy Questions and Answers on the Maps, for the Lower Forms*,（London: T.J.Allman, 1867）など。

(13)　GERBER, Rod, 'Geographical education' in SALA, Maria ed., *Geography*, Volume 1,（Oxford: EOLSS Publishers, 2009）, p. 129.

(14)　SITWELL, O.F.G., *Four Centuries of Special Geography*,（Vancouver: UBC Press, 1993）の巻末には，15 世紀後半以降の膨大なリストが記載されている。

(15)　DEVEREUX, Marion, *Geography in Rhyme, adapted for young pupils and the use of schools*,（London, T.J. Allman, 1866）.

(16)　DEVEREUX, M., *Geography in Rhyme,* pp. iii−iv.

(17)　1866 年に刊行された教科書だが，現段階では，福澤諭吉がこの書物を参照したかどうか未詳である。

(18)　DEVEREUX, M., *Geography in Rhyme*, p. 4, p. 16, p. 17, p. 22, p. 26, p.27, p. 47 ほか多数。科白が，“on your maps”などと複数形になっていることからも，生徒たちが教室にかけられた掛図ではなく，個別に持っている地図を見ていたのではないかと推察される。（尤も，児童が個別に地図を所持していたとは限らず，学校から貸与されていた可能性や，数名で地図を共用していた可能性はある。）

(19)　福澤も『世界国尽』序文に「今爰（こゝ）に世界國盡の著あるも，專ら兒童婦女子の輩をして世界の形勢を解せしめ，（後略）」と記している。いわゆる知識人層の大人は，福澤の『西洋事情』（1866 年）を読みこなしていた。

(20)　DEVEREUX, M., *Geography in Rhyme*, p. 4.

(21)　文部省編『学制百年史』（帝国地方行政学会，1972）。本書は文部科学省の下記サイトでも閲覧できる。http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1317552.htm

(22)　DEVEREUX, M., *Geography in Rhyme*, p. iii.

(23)　文部省『小學教則』（東京：官版，1873 年），7−10 頁。

(24)　川村博忠「明治初期の文明開化と地理教育」東亜大学総合人間・文化学部『総

合人間科学』第 3 巻，2003 年 3 月，22−23 頁。

(25)　文部省『小學教則』（東京：官版，1873 年）。

(26)　唐沢富太郎『教科書の歴史』（創文社，1956 年），84−88 頁。

(27)　福澤諭吉『世界国尽』（『全集』第 2 巻），585 頁。

(28)　Verplanck は弁護士・政治家・著述家で，1825−33 年ニューヨーク州選出のアメリカ下院議員も務めた。2017 年段階では，筆者は Verplanck の原文未見である。

(29)　福澤諭吉『世界国尽』（『全集』第 2 巻），591−592 頁。

(30)　福澤諭吉『西洋旅案内』（『全集』第 2 巻，岩波書店，1959 年），115 頁。

(31)　わずかに巻三のロシアの領土に関する箇所に，「朝鮮國の堺まで勢せまる雙頭の鷲の旗影」（『全集』第 2 巻，628 頁）とあるのみ。後年の福澤の活動を考えるとやや不思議な感じはするが，依拠した英米の教科書類の記述が少なかったことも関係あるだろう。英米の教科書の多くは中朝関係に短く触れる程度だったが，*Mitchell's School Geography*（Philadelphia, 1860），p. 300 には，興味深い記述が見られる。

(32)　福澤諭吉『世界国尽』（『全集』第 2 巻），593−595 頁。

(33)　福澤諭吉『世界国尽』（『全集』第 2 巻），594−595 頁。

(34)　*Mitchell's School Geography*, pp. 296−297．一方，*Cornell's Primary Geography* は中国の政治や歴史に特に言及しておらず，*Cornell's High School Geography* の記述もあっさりしている（pp. 257−259）。

(35)　GOLDSMITH, Y., *A Grammar of General Geography*,（London: Longmans, 刊行年不明），pp. 88−89.

(36)　福澤諭吉『世界国尽』（『全集』第 2 巻），592−593 頁。

(37)　DEVEREUX, M., *Geography in Rhyme*, p. 135.

(38)　*Mitchell's School Geography*, p. 297.

(39)　福澤諭吉『世界国尽』（『全集』第 2 巻），664 頁。

(40)　この点については，松田宏一郎『擬制の論理』（慶應義塾大学出版会，2016 年）第一章の中で，詳しく論じられている。

(41)　箕作麟祥「人民の自由と土地の気候と互に相関するの論」『明六雑誌』第四号，1874 年。発行は 1874 年なので，『世界国尽』より後年になる。

(42)　箕作麟祥「人民の自由と土地の気候と互に相関するの論」『明六雑誌』第四号，1874 年，山室信一，中野目徹校注『明六雑誌』上，岩波文庫，1999 年，145 頁。

(43)　松田宏一郎『擬制の論理』（慶應義塾大学出版会，2016 年），26−27 頁。

(44)　福澤諭吉『世界国尽』（『全集』第 2 巻），612−613，663−665 頁。

(45)　アルバート・クレイグ『文明と啓蒙』（慶應義塾大学出版会，2009 年），第 2

章。

（46）　福澤諭吉『文明論之概略』（慶應義塾大学出版会，2009 年），34 頁。（『全集』第 4 巻，岩波書店，1959 年，24 頁。）

（47）　巻三イギリスの頭書で用いられている。福澤諭吉『世界国尽』（『全集』第 2 巻），612 頁。

（48）　福澤諭吉『世界国尽』（『全集』第 2 巻），595 頁。

（49）　福澤諭吉『世界国尽』（『全集』第 2 巻），597 頁。

（50）　GOLDSMITH, Y., *A Grammar of General Geography*, p. 125.

（51）　*Cornell's High School Geography*, p. 293.

（52）　*Mitchell's School Geography*, p. 318.

（53）　福澤諭吉『世界国尽』（『全集』第 2 巻），605 頁。

（54）　福澤諭吉『世界国尽』（『全集』第 2 巻），605−606 頁。

（55）　福澤諭吉『世界国尽』（『全集』第 2 巻），663 頁，666−668 頁。

（56）　福澤諭吉『世界国尽』（『全集』第 2 巻），614 頁。

（57）　福澤諭吉『世界国尽』（『全集』第 2 巻），615−617 頁。

（58）　福澤諭吉『世界国尽』（『全集』第 2 巻），616−617 頁。

（59）　福澤諭吉『世界国尽』（『全集』第 2 巻），616 頁。

（60）　GOLDSMITH, Y., *A Grammar of General Geography*, pp. 40−41.

（61）　*Mitchell's School Geography*, p. 245.

（62）　福澤諭吉『世界国尽』（『全集』第 2 巻），636 頁。

（63）　福澤諭吉『世界国尽』（『全集』第 2 巻），635 頁。

（64）　Thomas Gage（1719？−1787）：イギリスの軍人。アメリカ独立戦争初期にイギリス軍の指揮を執り，1774−75 年にマサチューセッツ湾総督を務めた。

（65）　福澤諭吉『世界国尽』（『全集』第 2 巻），635−637 頁。

（66）　源昌久『近代日本における地理学の一潮流』（学文社，2003 年），21 頁。

（67）　寒帯については「寒帯の地には禽獣草木少く，人の身體小短にして愚なり」と述べられている。福澤諭吉『世界国尽』（『全集』第 2 巻），658−659 頁。

（68）　*Mitchell's School Geography*, pp. 29−35; *Cornell's High School Geography*, p. 11, p. 13.

（69）　*Mitchell's School Geography*, p. 43.

（70）　福澤諭吉『世界国尽』（『全集』第 2 巻），664 頁。

（71）　アルバート・クレイグ『文明と啓蒙』，72−74 頁。

（72）　福澤諭吉『福澤全集緒言』（『全集』第 1 巻），37 頁。